

タイ中等教育における日本語学習意欲を高める要因と学習行動との関係

——日本語教師の日本語指導時の内発的動機づけ要因——

吉川 景子

1. はじめに

日本語を学習しようとする人たちの日本語学習への意欲を高めるためには、どのような手段や方法があるだろうか。どうすれば興味をもって学習に取り組むのだろうか。学習者の学習意欲を高め、それを維持することは重要ではあるが、同時に非常に難しい問題でもある。

タイ中等教育では、評価の対象は、通常の間・期末試験のような定期試験の結果だけではなく、小テストや宿題、授業中の発表や態度など、日々の授業での積極的な取り組みも重視され、「日本語学習意欲」として評価されている。倉八（1998）は日本の英語教育について、日常生活の中からは英語学習の必要性が認められず、教室内での意欲の喚起こそが英語学習持続への鍵だと述べ、教室内での学習意欲の喚起の重要性を指摘している。タイの中等教育における日本語教育は「外国語としての日本語」（JFL: Japanese as a Foreign Language）であり、日本の英語教育と同様の位置づけであるだけに、特に教室内での学習意欲を高めることが重要な要因であるように思われる。それでは、タイの高校生が、特に教室内で日本語学習への意欲を掻き立てるためにはどのようにすればいいのだろうか。彼らはどんなときに、あるいはどのようにして日本語学習へ意欲を掻き立て、そして意欲を持続させ、日本語学習を実行してきたのだろうか。一年間の学校生活や授業を通して、どんなときに“がんばって日本語を勉強しよう”とやる気になったのだろうか。タイの高校生の日本語学習への学習意欲を高めるものやその行動について調査し、日本語学習意欲と学習行動との関係を明らかにすることによって、タイ中等教育における、特に学校生活や授業を通しての「学習意欲」に焦点をあてた授業の在り方を検証する。

学習意欲に関わる要因の一つとして動機付け研究がある。Deci と Ryan は外国語学習における動機付け研究において、動機を「内発的動機(intrinsic motive)」と「外発的動機(extrinsic motive)」の二つに分けている。内発的動機とは「活動すること自体がその活動の目的であるような行為の過程、つまり、活動それ自体に内在する報酬のための行動を引き起こす動機」、外発的動機とは「何らかの目的を達成する手段として、または、報酬を得る、罰を逃れるなどの道具的な目的を果たすための行為として行われる行動を引き起こす動機」である。Deci and Ryan(1985)は、内発的動機は「有能さ(competence)」、「自己決定性・自律性(self-determination/autonomy)」、「関係性(relatedness)」の3要因から構成されていると述べている。「有能さ」とは、学習者が日本語を使ってコミュニケーションができた、というような「できた」という感覚(有能感)であり、これが自信につながり、内発的動機を高めると言われている。「自己決定性・自律性」とは、学習者が

ある程度自分の行動を自分自身で決定しながら学習を進めることである。例えば、タイの高校生の日本語授業に関する事柄では、自発的に日本語で発表を行ったり、発表内容を自分で自由に決めたりすることなどがあげられる。「関係性」は教師やクラスメートなど「重要な他者」ととの関係を求める内発的な社会的欲求である。教師との関係やクラスメートとの関係、自分がクラスにどれだけ居場所を確保できているかという意識などが内発的動機付けにも関わると考えられる。上淵（2004）はこれら3つの要素の相互作用によって内因性の動機（内発的動機）の強さが左右されると述べている。また、村野井（2006）は第二言語学習（外国語としての言語学習を含む）には特に有能性と関係性を高めることが大切で、第二言語学習によって、学習者自身が自分は何かなことができるようになるのか（有能性）、そして、どのような他者と関わりを持つことができるのか（関係性）をしっかりと認識することによって学習者の第二言語学習に対する内発的動機は高まると考えられる、と述べている。タイの高校生の日本語学習の場合も、日本語学習へ動機付け、動機付けられた日本語学習意欲を維持し、欲求を満たしていくためには、この内発的動機の構成要素が重要になると思われる。

本研究では、タイの高校生の場合、どんなときに日本語学習への意欲が高まり、学習行動を喚起したのか、について検証する。

2. 調査の概要

2.1 目的

タイの高校生の日本語学習意欲を高める要因と学習行動について調査し、どんなときに日本語学習への意欲が高まり、学習行動を喚起したのか、日本語学習意欲を高める要因を明らかにし、その要因と学習行動との関係を検証する。

2.2 方法

2.2.1 調査実施年月

調査の実施は、タイの高校では一般的に2月で授業が終わり、2月末から3月上旬にかけて期末試験期間に入るので、一年の授業が終わる2010年1月から2月に行った。

2.2.2 調査対象者

本研究では次の3つの条件を満たす高校生を対象とした。

- (1)週4コマ以上の専門科目として日本語を開講している高校
 - (2)タイ中等教育用教科書『あきこと友だち』（国際交流基金バンコク日本文化センター、紀伊國屋書店（タイランド））を使用している高校
 - (3)タイ人日本語教員がいる高校（日本人日本語教員のみの学校は対象外とした）
- (1)は日本語コースの開講コマ数についてである。開講コマ数は学校によって異なり、週1コマ（約50分）から8コマ前後まで様々である。また、クラブ活動、選択科目、専門科目の3つの位

置づけがあるが、コマ数によって明確に線引きされていない。本研究ではクラブ活動(週1コマ)、選択科目(週1～3コマ)、専門科目(4コマ以上)という概念で分けることにし、日本語科目の位置づけにより、授業の進度や内容、学習行動が異なると考えられるため、まず専門科目として開講している高校に焦点をあてた。(2)は上記教科書がタイの高校で広く使われており、使用教材の違いで差が出ないように考慮した。また、質問紙項目の中に上記教科書に関する項目を含めているため、条件にあげた。(3)は日本人日本語教員のみ为学校では学習環境が異なること、一般的にタイ人教員がいる学校の方が、日本語科目が持続的に開講される可能性が高いことなどから、タイ人日本語教員がいることを条件とした。

吉川(2010)で回答の得られた高校30校の高校1年生を対象とした。その結果、29校から回答が得られたが、未記入であったものなどは削除した。最終的に有効であった調査対象者は、910名(男213名、女686名、男女別不明11名)であった。

2.2.3 質問紙

(1)日本語学習意欲を高める要因質問紙

質問項目は坂本(2004)を参考に、タイの高校生が遭遇し得る場面や教科書の学習内容に関する質問なども含め、想定される日本語学習意欲に関する質問、37項目を作成した。

(2)日本語学習行動質問紙

李(2003)を参考に、日本語学習に直接関係するものだけではなく、高校生が日常生活の中で日本語に接する可能性があると考えられる場面も考慮して、日本語学習としての諸行動を取り入れ、質問項目20項目を作成した。吉川(2010)で使用した質問紙と同じである。

まず日本語で質問紙を作成し、質問の意図が忠実に反映されるよう、タイ人日本語教員にタイ語に翻訳してもらい、次に1組の日本人、タイ人日本語教員に互いに意味のニュアンスを確認しながらチェックしてもらった。最後にもう1名のネイティブチェックを受けた。

2.2.4 調査手続き

質問紙を各校に配布、または郵送し、各校の教員が授業中に学習者に質問紙を配布し、記名法で回答してもらった。各校の教員には書面で「研究以外の目的には使用しない」旨を、学習者には質問紙上で「この調査は研究目的のためで、学校の成績とは関係がない」旨を教示した。各質問項目への回答は、「日本語学習意欲を高める要因質問紙」については「4とてもがんばろうと思う」「3がんばろうと思う」「2あまりがんばろうと思わない」「1全然がんばろうと思わない」の4件法で、「日本語学習行動質問紙」については「4いつも行っている」「3よく行っている」「2時々行っている」「1全然行わない」の4件法で評定してもらった。質問紙はタイ語版を使用した。

3. 結果と考察

3.1 日本語学習意欲を高める要因の評定平均値

日本語学習意欲を高める要因 37 項目について各項目の 4 段階平均値を求めた。平均 3.31 点(SD 0.69)であった (表 1、図 1)。

表 1 日本語学習意欲を高める要因 評定平均値

日本語学習意欲を高める要因	平均	SD
(1)日本語の授業がよく分かったとき	3.27	0.57
(2)将来行きたい大学について関心を持ったとき	3.40	0.70
(3)授業中、友達とペアやグループで日本語を練習したとき	3.19	0.60
(4)授業で『あきこと友だち』の「読解」を勉強しているとき	3.19	0.63
(5)友達の日本語の成績が自分よりよかったとき	3.33	0.71
(6)先生にしかられたとき	3.12	0.76
(7)授業で日本文化を体験したとき	3.40	0.64
(8)日本語のクラスで仲のよい友達ができたととき	3.16	0.66
(9)日本語の宿題や作品に先生がコメントを書いてくれたとき	3.21	0.62
(10)授業で『あきこと友だち』の「文法」を勉強しているとき	3.22	0.68
(11)日本人の前で発表するとき	3.23	0.71
(12)日本語能力試験などの試験を受けようと思ったとき	3.43	0.68
(13)日本語の授業がおもしろいとき	3.46	0.62
(14)日本語のクラスの友達からはげまされたとき	3.39	0.63
(15)日本語の授業やイベントなどで日本人と触れ合う経験をしたとき	3.29	0.70
(16)日本語の成績が下がったとき	3.50	0.69
(17)授業で『あきこと友だち』の「聴解」を勉強しているとき	3.18	0.64
(18)クラスメートの前で発表するとき	3.12	0.66
(19)日本語の授業がよく分からないとき	3.29	0.71
(20)将来つきたい職業に関心を持ったとき	3.52	0.66
(21)先生にほめられたとき	3.46	0.62
(22)日本語のクラスで日本語の勉強のライバルが見つかったとき	3.25	0.78
(23)日本語が上手になっていると自分で感じたとき	3.51	0.59
(24)文化祭や日本語キャンプなどの日本語の行事を体験したとき	3.36	0.68
(25)授業で『あきこと友だち』の「会話」を勉強しているとき	3.24	0.62
(26)日本語の成績が上がったとき	3.60	0.59
(27)先生が授業中、席をまわってみてくれるとき	3.34	0.65
(28)友達が自分の発表を一生懸命聞いてくれたとき	3.31	0.65

(29)日本語の授業がつまらないとき	2.66	0.83
(30)授業で文字（ひらがな、かたかな、漢字）を勉強しているとき	3.34	0.68
(31)日本語コンテストがあるとき	3.13	0.78
(32)自分の日本語の成績が友達よりよかったとき	3.40	0.69
(33)先生にはげまされたとき	3.50	0.62
(34)自分の日本語の宿題や作品が教室に貼ってもらえたとき	3.39	0.71
(35)友達が一生懸命日本語を勉強しているとき	3.46	0.64
(36)授業で『あきこと友だち』の「日本文化」を勉強しているとき	3.38	0.64
(37)日本語の発表が上手にできたとき	3.31	0.66

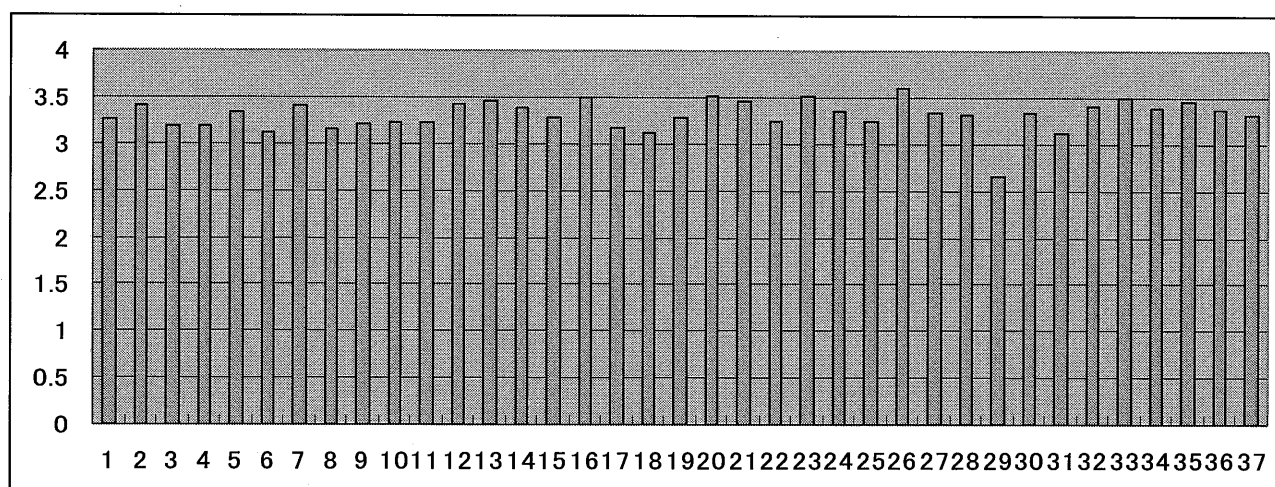


図1 日本語学習意欲を高める要因 評価平均値

平均値が高い項目は順に「(26)日本語の成績が上がったとき(3.60)」、「(20)将来つきたい職業に関心を持ったとき(3.52)」、「(23)日本語が上手になっていると自分で感じたとき(3.51)」、「(16)日本語の成績が下がったとき(3.50)」、「(33)先生にはげまされたとき(3.50)」であった。日本語の成績が上がったり、上手になっていると感じたときは、自分は日本語の勉強ができると認識し、さらにがんばろうとを感じるのであろう。逆に成績が下がったときも、がんばって勉強しなければ、という気持ちになると推測される。また、先生が自分のことを見て、はげましてくれたことによって、教室の中での自分の居場所を確認でき、やる気につながると考えられる。また将来の職業に関心を持ち、日本語を勉強していることの意味や目標が明確化されることによって、学習意欲が高まると言える。

平均値が低い項目は「(29)日本語の授業がつまらないとき(2.66)」であった。「日本語の授業がつまらない」というのは“授業内容が難しくて理解できない”、“理解できるが単調である”、“学

習するペースが遅く、簡単すぎる”、“クラスのまとまりがなく、雰囲気がよくない”、など様々な原因が考えられる。授業がつまらなく感じる原因は何にあるのか、明らかにする必要があるが、今後の検討課題としたい。

3.2 日本語学習意欲を高める諸要因と学習行動との重回帰分析

37 項目の日本語学習意欲を高める要因のうち、特定の要因が学習行動に影響を及ぼしているかどうかを調べた。各項目間の相関関係が十分に低いことを確認した後で、各項目に対する各学習者の 4 段階の得点を説明変数、各学習者の学習行動得点を目的変数として、重回帰分析⁽¹⁾を行った (表 2)。

表 2 重回帰式

項目	標準偏回帰係数	判定
1	0.1313	**
2	0.0694	*
3	0.0708	*
8	0.0766	*
14	-0.0840	*
15	0.1094	**
19	0.0768	*
24	0.0715	*
27	0.0679	*
29	0.0886	**
31	0.1158	**
32	0.0927	*
決定係数	0.3649	
重相関係数	0.6041	

** : $p < .01$ * : $p < .05$

その結果、5%水準で有意となった学習意欲を高める要因項目は(1)、(15)、(29)、(31)、(2)、(3)、(8)、(14)、(19)、(24)、(27)、(32)の 12 項目であった。以下、標準偏回帰係数⁽²⁾が 0.1 以上の項目を見ていく。「(1)日本語の授業がよく分かったとき」から、日本語の授業がよく分かったことで、自分も理解できるという自信を持ち、やる気を喚起し、学習行動に移す傾向があると言える。「(31)日本語コンテストがあるとき」からは、日本語コンテストがあるときにがんばろうと思う生徒は、思うだけではなくコンテストに向けて学習行動に取り組む傾向が強いと考えられる。「(15)日本語

の授業やイベントなどで日本人と触れ合う経験をしたとき」からは、学習者にとって日本語の学習が何に結びつくのか、海外の教育現場では実感できないことが多いが、実際に日本人に会い、日本語を通して触れ合うことにより、学習の先にあるものを認識することができ、やる気、そして行動につながると考えられる。

3.3 日本語学習意欲を高める要因の因子分析的検討

結果を表 3 に示す。日本語学習意欲を高める要因 37 項目を用いて主因子法による因子分析⁽³⁾を行い、バリマックス回転後、2つの因子を抽出した。因子は固有値が 1.00 以上のもの、因子負荷量が 0.45 以上のものを採用した。

第 1 因子は「(33)先生にはげまされたとき」、「(35)友達が一生懸命日本語を勉強しているとき」、「(22)日本語のクラスで日本語の勉強のライバルが見つかったとき」、「(28)友達が自分の発表を一生懸命聞いてくれたとき」、「(27)先生が授業中、席をまわってみてくれるとき」、「(14)日本語のクラスの友達からはげまされたとき」といった授業の構成要素に関するもので、重要な他者である先生・友達が自分のことを気にかけてくれているという、人間関係に起因するもの、「(34)自分の日本語の宿題や作品が教室に貼ってもらえたとき」、「(21)先生にほめられたとき」、「(32)自分の日本語の成績が友達よりよかったとき」、「(26)日本語の成績が上がったとき」、「(23)日本語が上手になっていると自分で感じたとき」、「(37)日本語の発表が上手にできたとき」といった達成感や有能感を感じられたときにがんばろうとやる気になるもの、「(15)日本語の授業やイベントなどで日本人と触れ合う経験をしたとき」、「(24)文化祭や日本語キャンプなどの日本語の行事を体験したとき」といった「日本」を体感したときにやる気になるもの、などから構成されていることが認められた。そこで第 1 因子を「関係性・有能感・日本体感」因子と命名する。先生やクラスメートとの人間関係は、クラスの中で重要な他者が自分のことを見てくれている、気にかけてくれている、存在を認めてくれているという内発的動機の構成要素である「関係性」と考えられる。また、「上手になっている」、「できた」という「有能感」も内発的動機の構成要素である。また日本を体感したときに「やる気が出た」というのは、勉強していることが教室の中だけのことでなく、それが現実の日本・日本人と結びついているという「関係性」を表し、日本語の学習意欲の喚起につながっていると考えられる。つまり、この因子は日本語学習意欲を高める因子として、内発的動機付けの重要性を示しているように思われる。

第 2 因子は「(17)授業で『あきこと友だち』の「聴解」を勉強しているとき」、「(10)授業で『あきこと友だち』の「文法」を勉強しているとき」、「(25)授業で『あきこと友だち』の「会話」を勉強しているとき」、「(4)授業で『あきこと友だち』の「読解」を勉強しているとき」、「(18)クラスメートの前で発表するとき」、「(30)授業で文字（ひらがな、かたかな、漢字）を勉強しているとき」の 6 項目から構成されており、教科書（『あきこと友だち』）の特定分野を勉強していると

きや文字の勉強、授業中に日本語で発表することなどに起因している。つまり、日本語学習そのものに強く興味をもっており、その機会を得ることがやる気につながっているように思われる。そこで第2因子を「日本語学習内容」因子と命名する。

表3 バリマックス回転後の因子負荷量

項目	第1因子	項目	第2因子
33	0.668071	17	0.60083
34	0.649118	10	0.600375
21	0.64391	25	0.582386
32	0.641967	4	0.551054
26	0.635848	18	0.531963
23	0.598097	30	0.507386
37	0.560659	11	0.449918
35	0.510218	19	0.444196
22	0.491867	29	0.442184
28	0.482288	36	0.435273
27	0.481638	9	0.431399
14	0.466507	31	0.422597
15	0.46642	16	0.387986
24	0.456872	12	0.385921
13	0.455614	1	0.368571
20	0.44824	35	0.366756
7	0.414357	15	0.361049
36	0.41278	6	0.346195
31	0.399238	3	0.336609
5	0.393958	22	0.325578
16	0.392211	5	0.323669
12	0.379343	28	0.322934
19	0.372185	27	0.317476
2	0.358766	37	0.312798
11	0.339652	8	0.284461
1	0.331232	13	0.282763

4. まとめ

タイの高校生の日本語学習意欲を高める要因と学習行動について調査し、両者の関係を検証した。タイの高校生は学習意欲を高める要因の中で、やればできるという自信や先生が自分のことを気にかけていてくれるといった気持ち、成績が下がってがんばらなければという気持ち、将来つきたい職業など目標と結びついたときにやる気になると評価し、逆に授業がつまらないときはがんばろうと思わないと評価していることが明らかになった。

“がんばって日本語を勉強しよう”と思う学習意欲を高める要因には「関係性・有能感・日本体感」、「日本語学習内容」の2つの因子が見られた。内発的動機の構成要素である「関係性」「有能感」が含まれていることから、タイの中等教育における日本語学習では内発的動機付けが重要な要因であることが示された。教師は生徒一人一人に目を配り、自分もできるという自信を持たせ、クラス全体の雰囲気を作っていくことが必要であろう。この結果は村野井（2006）の「第二言語学習には特に有能性と関係性を高めることが大切だ」という考えを支持している。また、日本語学習自体に興味を持っている学習者は学習そのものにやる気を感じているので、教師の役割として学習者がまず日本語への興味を持つよう、授業を計画することも重要である。

日本語学習意欲を高める要因と学習行動に関しては2つの因子に含まれていない項目「(1)日本語の授業がよく分かったとき」、「(31)日本語コンテストがあるとき」が学習行動に影響を及ぼしていることがわかった。クラスには理解の速い生徒、理解に時間のかかる生徒が混在している。すべての学習者が理解できるようスモールステップを踏んだ授業を行い、自信を持たせること、より高い目標を持つ学習者にはコンテストに参加する機会などを与えることがやる気を喚起し、学習行動に結びつくのではないだろうか。つまり、学習者のレベルやニーズに合わせた対応が必要であると言える。「(15)日本語の授業やイベントなどで日本人と触れ合う経験をしたとき」も学習行動に影響を及ぼしていることから、例えば地域の日本人に日本文化の紹介を手伝ってもらったり、日ごろの学習の成果をスピーチ発表会のような形で行い、ゲストとして見に来てもらう、といった地域の日本人とのネットワーク作りも重要だと考えられる。しかし、自分の地域にそのようなネットワークがない場合や自分一人で活動を計画するのが難しい場合は、他地域のタイ人教員との協力体制が不可欠である。他校と合同で日本語キャンプを行ったり、他校の教員が持っている日本人ネットワークを活用し、自分の学校に来てもらうことも一つの方法である。教師が孤立せず、学校間での情報が入ってくるようにしておくこと、そして、そのネットワークに合わせてできる範囲で活動を計画し、実行することが教室での学習を実際の外の場面と結びつけることにつながるであろう。

本研究では日本語学習意欲を高める要因と学習行動について検証した。日本語学習意欲を高める要因と学習行動が学習成果（成績）にどのような影響を及ぼすのかについても検証する必要があるが、今後の課題としたい。

注

- (1) 重回帰分析にはエクセル統計 2006 を使用した。
- (2) 標準偏回帰係数の値が大きいほど従属変数の予測に寄与する。
- (3) 因子分析にはエクセル統計 2006 を使用した。

参考文献

- 上淵寿 (2004) 『動機づけ研究の最前線』、北大路書房
- 倉八順子 (1998) 『コミュニケーション中心の教授法と学習意欲』、風間書房
- 坂本裕子(2004) 「第二言語習得における学習の動機付けと学習意欲—中国人日本語学習者の事例—」『言語コミュニケーション研究』第 4 号、愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会、pp60-76
- 村野井仁 (2006) 『第二言語習得研究から見た効果的な英語学習法・指導法』、大修館
- 吉川景子 (2010) 「日本語学習動機と学習行動との関係—タイの高校生の場合—」『日本語教育論集』第 19 号、姫路獨協大学大学院言語教育研究科日本語教育コース、pp41-48
- 李受香 (2003) 「第 2 言語および外国語としての日本語学習者における動機づけの比較—韓国人日本語学習者を対象として—」『世界の日本語教育』第 13 号、国際交流基金日本語国際センター、pp75-92
- Deci, E. L., and Ryan, R. M. (1985) *Intrinsic motivation and self-determination in human behavior*. New York: Plenum.